

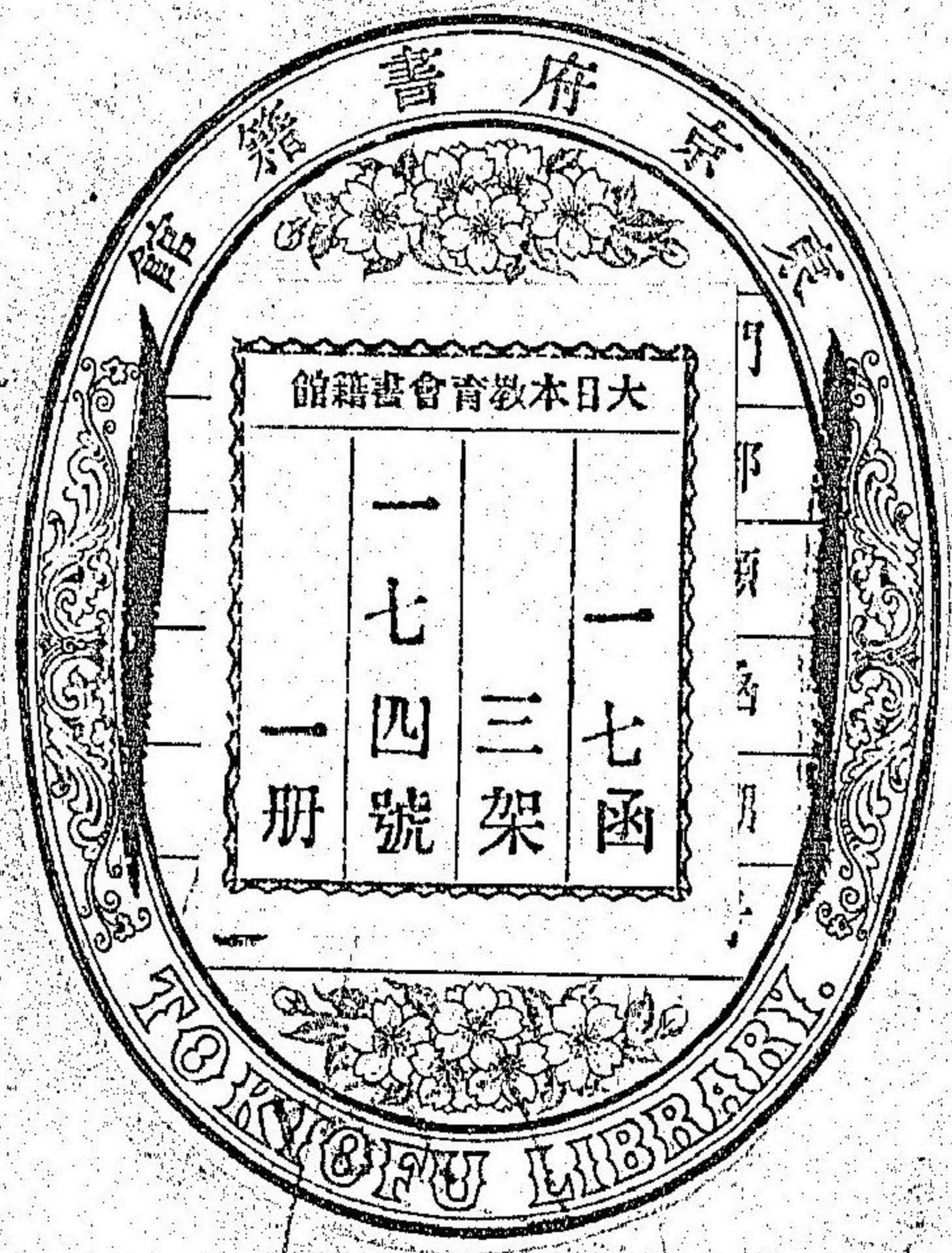
時辰儀説

熊谷東洲著

全

特 37

428



056146-000-7

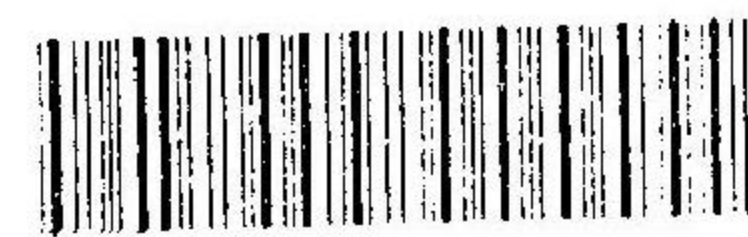
特37-428

時辰儀の説

熊谷 東洲/著

M10

CAK-0026



特 37

420

時辰儀說



心學講  
曹洞宗

熊谷東洲著  
西有穆山閱

# 時辰儀說

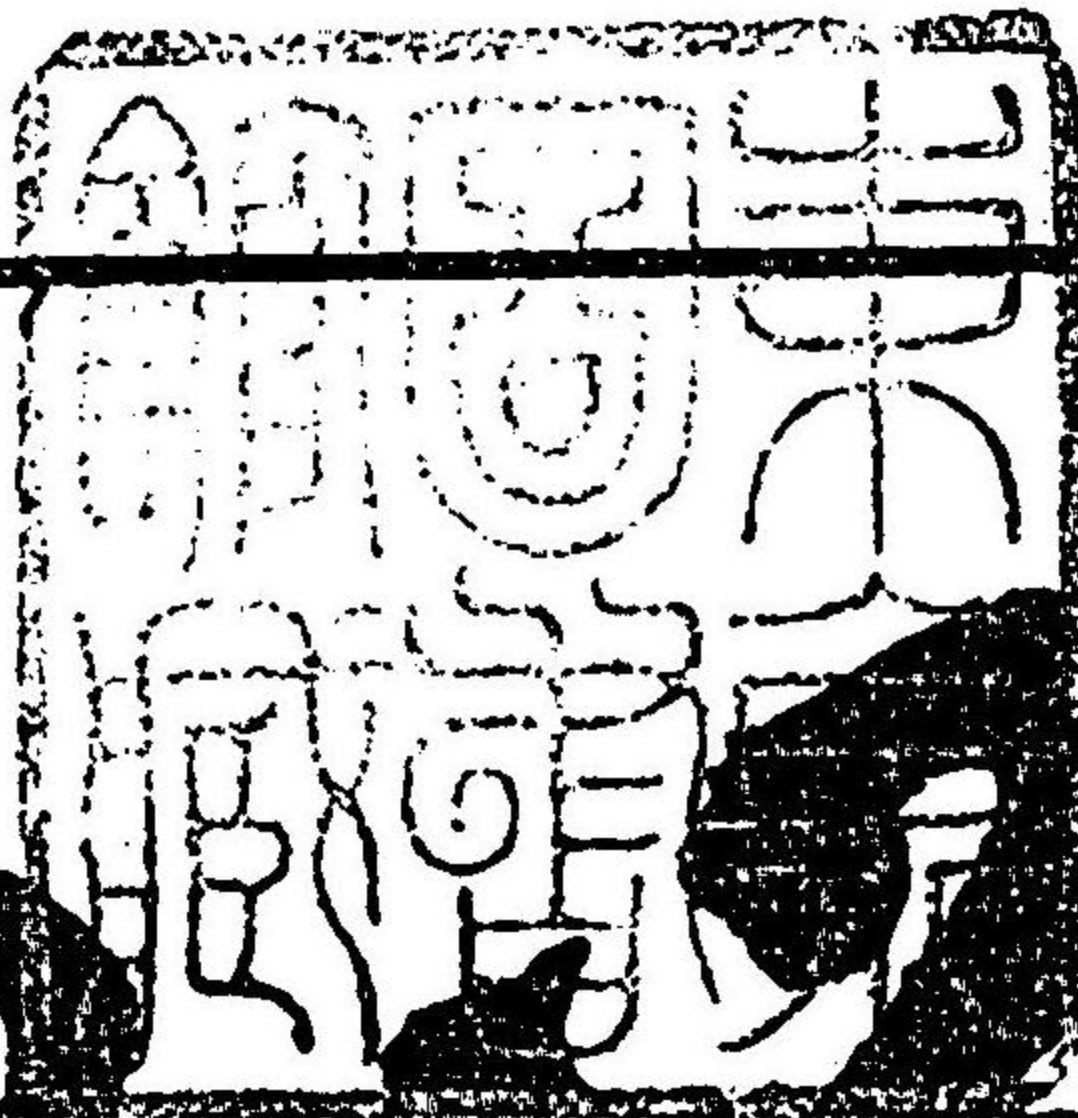
版權  
免許

時習堂

熊谷宗太藏版

特 37

428



時辰儀說

心學講

熊谷全東洲者

曹洞宗

西行親山園

時辰儀說

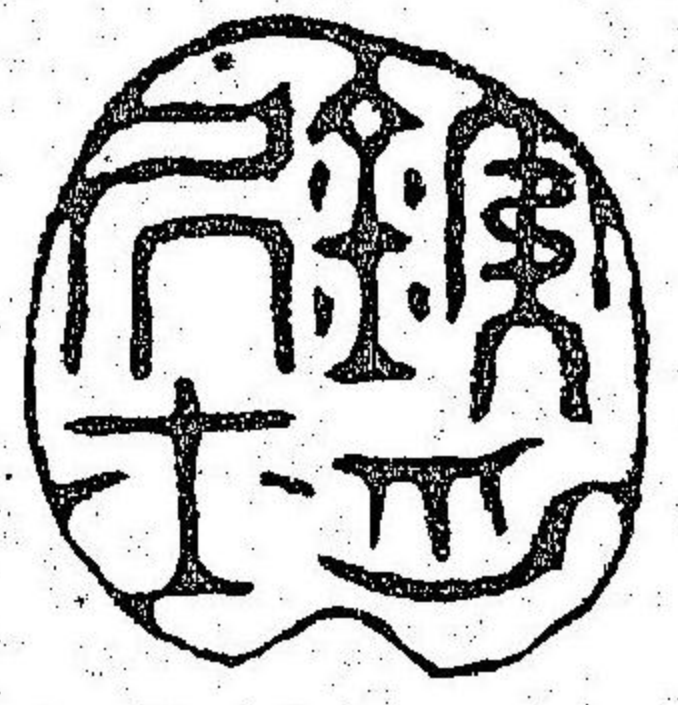
版權  
免許

時辰儀說

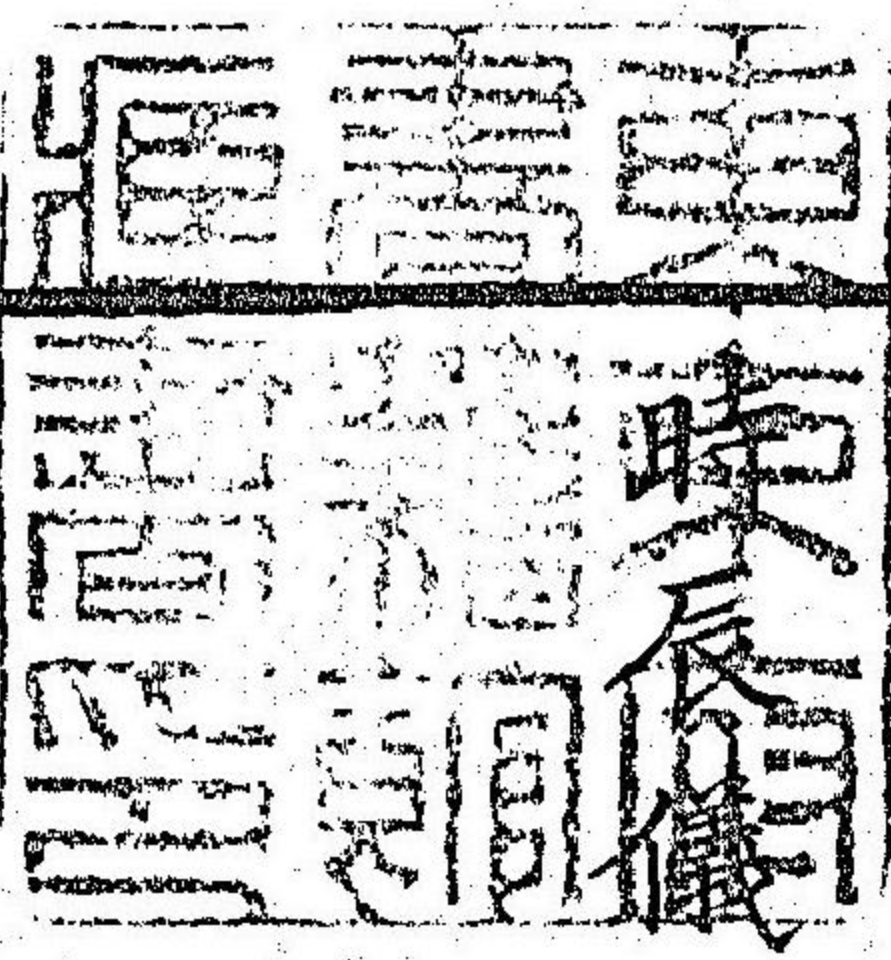
熊谷全東洲者

心後手

時辰儀



時辰儀の說



熊谷東洲 著  
西有穆山 閱

夫時計の時計たる所以を何ぞ人間此一生を春  
夜乃夢此如く徒ふ光陰残過せばあらば人死を  
るふ及で冷たる身へ家此内ふも止めば残る所  
へたゞ空しき名のみ善き名の残るも悪しき名  
の残るも皆我が今の心あり其心へ天地と同

時辰儀

根萬物と一體なれど四時の流行も随ひ昨日此  
答へ今日開き朝の花も夕も散り暫も止らざる  
を見て光陰残惜む其盛り長き有り短きあるを  
見て人間の老少不定を悟らむも實に花も無情  
あり有情の人此師たり

朝負此をるを去る人なかりたり

朝負へるをのと思ふおろくきよるひる絶間ありと云ふ也

子在川上曰逝者如斯夫不舍晝夜萬物一ツと

て教にあらざるをなかり然も眼不睹眼と己が眼

て己が眼へ見へぬと同一く己が心で己が心を

見る事難し他の老少不定を口もを説とも己が

事とへ更み知らば光陰矢の如くと耳もを聞ど

も天地の上此事との思ひ是亦己が身も切也

る事とも志らば時間を徒も過し老て後恨む悔

とも其甲斐露程もなし此光陰を貴ぶと徒らみ

はるとの間も禍福ある事確りなりされは易經

ふも積善家必有餘慶積不善家必有餘殃と説給

へども凡夫を偏り聖人勸懲此教と此と思ひ遠

く見<sup>み</sup>ま<sup>り</sup>て光陰<sup>くわんいん</sup>を我身<sup>わがみ</sup>の上<sup>うへ</sup>に<sup>を</sup>し<sup>む</sup>事を<sup>こと</sup>志<sup>こころ</sup>ら  
 ば又<sup>また</sup>佛<sup>ぶつ</sup>教<sup>きやう</sup>も今日<sup>こんにち</sup>只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>を徒<sup>たづ</sup>らに過<sup>こ</sup>させま<sup>し</sup>きか  
 為<sup>な</sup>る三世<sup>さんぜ</sup>を示<sup>し</sup>り現世<sup>げんぜ</sup>も前世<sup>ぜんぜ</sup>に種次第<sup>しゆだい</sup>来世<sup>らいぜ</sup>も現  
 世<sup>げんぜ</sup>に種次第<sup>しゆだい</sup>過去<sup>こくわ</sup>も未来<sup>みらい</sup>も只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>を等閑<sup>おろそ</sup>  
 み思<sup>おも</sup>ふ人<sup>ひと</sup>の死<sup>し</sup>して地獄<sup>ぢごく</sup>に往<sup>ゆ</sup>たりと蓄<sup>たく</sup>で含<sup>く</sup>むふ  
 やうも説<sup>せつ</sup>給<sup>たま</sup>へとも是<sup>これ</sup>亦<sup>また</sup>方便<sup>べんべん</sup>の説<sup>せつ</sup>と思<sup>おも</sup>ふ余<sup>よ</sup>所<sup>ところ</sup>も  
 聞<sup>き</sup>か<sup>り</sup>て用<sup>もち</sup>ふる人<sup>ひと</sup>少<sup>すく</sup>く光陰<sup>くわんいん</sup>を徒<sup>たづ</sup>らに過<sup>こ</sup>り老<sup>おい</sup>て後<sup>のち</sup>  
 先<sup>せん</sup>非<sup>ひ</sup>悔<sup>くわい</sup>るも更<sup>さら</sup>に詮<sup>せん</sup>を<sup>し</sup>爰<sup>こゝ</sup>にかた<sup>が</sup>けなくも  
 文明<sup>ぶんめい</sup>開化<sup>かいけ</sup>の時<sup>とき</sup>も逢<sup>あ</sup>ひ時計<sup>とけい</sup>といふ器械<sup>きかい</sup>世<sup>よ</sup>に出<sup>い</sup>で

より公用<sup>こうよう</sup>商事<sup>しやうじ</sup>百般<sup>ひやくぱん</sup>に世務<sup>せむ</sup>時限<sup>じげん</sup>何<sup>なに</sup>やまらぬを肝<sup>かん</sup>  
 要<sup>よう</sup>とせんが為<sup>ため</sup>に人<sup>ひと</sup>皆<sup>みな</sup>珍重<sup>ちんじゆう</sup>して都鄙<sup>とひ</sup>尊卑<sup>そんひ</sup>共<sup>とも</sup>に之<sup>これ</sup>  
 を購<sup>かひ</sup>ひ時間<sup>じかん</sup>の遅速<sup>ちそく</sup>を明<sup>あきら</sup>か<sup>り</sup>知<sup>ち</sup>て衆<sup>しゆう</sup>も違<sup>い</sup>約<sup>やく</sup>に迷<sup>めい</sup>  
 惑<sup>ごつ</sup>を施<sup>せ</sup>さば實<sup>じつ</sup>に國家<sup>こくわ</sup>の利益<sup>りえき</sup>に補<sup>ほ</sup>助<sup>すけ</sup>するものと  
 いふべし我生<sup>わがせい</sup>國<sup>こく</sup>美濃<sup>みの</sup>國<sup>こく</sup>土岐<sup>とぎ</sup>郡<sup>ぐん</sup>妻木<sup>つまき</sup>村<sup>むら</sup>といふも  
 邊鄙<sup>へんひ</sup>の山<sup>さん</sup>中<sup>ちゆう</sup>なれとも近<sup>きん</sup>来<sup>らい</sup>多<sup>おほ</sup>く陶器<sup>たうき</sup>に産物<sup>さんぶつ</sup>を出<sup>い</sup>  
 せり四<sup>し</sup>五<sup>ご</sup>年<sup>ねん</sup>已<sup>い</sup>前<sup>ぜん</sup>の事<sup>こと</sup>なりしが野子<sup>やし</sup>年<sup>ねん</sup>齡<sup>れい</sup>還<sup>かへ</sup>曆<sup>れき</sup>も  
 及<sup>およ</sup>び故郷<sup>こきやう</sup>に親族<sup>しんしゆく</sup>も對<sup>たい</sup>面<sup>めん</sup>し且<sup>かつ</sup>亡<sup>な</sup>父<sup>ふ</sup>の墓<sup>はふ</sup>參<sup>ま</sup>をも  
 なさんと故郷<sup>こきやう</sup>濃州<sup>のうしゆう</sup>も至<sup>いた</sup>り久<sup>ひさ</sup>しぶりふて村中<sup>むらちゆう</sup>の

形状かたちを見るみふ元もとより邊鄙へんぱ此土地このちなれば隨まて開ひら  
 化くわも遅おそし時計等とけいハ奢あやり此器械このかがいなりといひく所ところ  
 持もちてる人ひと更さらふぢし然しかし陶器職とうきしやく此中このちゆうハ熊谷松兵衛くまがやまつべ  
 衛ゑと言いふ者ものあり生来質素きやうらいしやうそふして費つひを省まき儉約けんやく  
 を主しよとし家業かぎやう找勤つとめて懈ゆるる事ことなく万事ばんじ其分限そのぶんげん  
 小過せうこべあらざ不事ふじを心こころ小辨せうべんへ身み小行せうかうふが故ゆゑ小  
 家いへハ豊ゆたかうふして一村いちそん此手本このてほんとも成なるへき人ひとなり  
 或時あるとき時計とけいを持来もつる商人あきひありける小不思議せうふしぎなる  
 小儉約けんやくに名なを得えたる此松兵衛このまつべゑが第一だいいち番ばん小買求かひもと

めたり朋友とも松兵衛まつべゑ小向むかひて貴殿きでん新世帯しんせたいとい言いを  
 小ら儉約けんやくと勉強べんきやうして小餘財せうよざいも貯たくわへ世人よじんの手て  
 本もとともいいてる者ものが今他いまたより先まづ小時計せうとけいを求もとめ  
 られし者もの最早もとも奢あやり小口こぐちを開ひらたり家いへの衰微せいかい近ちかき  
 小何なにらんと言いハ松兵衛まつべゑ笑わらて曰いひ我が求もとふ時計とけいハ  
 決かして奢あやり何なにらば其故そのゆゑハ今日けふ家業かぎやうの為ため小遣つづふ  
 雇やとひ人ひと其餘そのあとの職人しやくじん小僧せうそう小至いたる追お十二三人じふにさんあり毎まい  
 朝起あしたし廻まわふとや甚煩勞しんぼんらうしく其上そのうへ時間じかん此費このひも多おほ  
 一殊ひと小夏なつ向むか等晝寢ひるねする者ものを起おこし廻まわせハ互たがひ小遅おそ

速を論ら中ちゆう小せう我われを嘲あざわら不ま者ものも何なにり已い来らいハ此この時とき  
計けい我われ掛か置おき時ときを定さだめ其その鳴な不まを相あひ面つ不ま起お起お止と時とき  
ハ嘲あざわらりを受うる事こともななく煩わづら勞らうも亦また少すく一ひと且かつ我われが工く  
夫ちゆう小せう雇やと人ひとを抱かかる始はじめ小せう先まづ此この時とき計けいを置おて時とき間かん此この  
定さだ法ぽうを立たて朝あさ何なに時とき不ま起お出い何なに時とき不ま朝あさ飯い何なに時ときに業ぎよ  
を始はじめ何なに時とき不ま晝ひる飯い何なに時ときのの間かん晝ひる休やす何なに時とき不ま業ぎよを仕し  
舞ま何なに時ときのの間かん夜よ業ぎよと時ときを割わり此この時とき計けいを證あ人ひとと一ひと  
耽たと定さだ約やくを一ひとて召よ抱かかへ若し昔むかしく者ものハ過あや代ひを命めい一ひと  
能よく守も不ま者ものも褒あや美びを遣つ一ひと上かみ下しも和あ合あ一ひとて家か業ぎよ出い

情なさせ人ひとが為ためなり我家わがや十二じふに三人さんにん何なにり一ひと日ひに一ひと  
時とき間かんの徳とく何なにれバ一ひと日ひ不ま一ひと人ひとの徳とくあり此この一ひと人ひとハ  
衣い食しょくいらバ給たま金かねいらバ凡おほ三さん人にん位ゐ不ま當ある一ひと  
と一ひとへり聞き人ひと深こく感かん心しん一ひとて各おの貧ひん福ふく不まか一ひとえら  
以も其その時とき不ま時とき計けいを數あ多ま求もとめ一ひとり此この頃ころ聞きくニ  
右みぎの村むら内うち不まてハ甚おほ時とき間かんをを一ひと家か業ぎよ出い精せい繁はん昌ちやう  
此このよ一ひと是これ全まく時とき計けいの徳とくなり

心こゝろ不ま時とき計けい不ま我われと身みを耻はて勤つとむ不ま人ひとのまゑ一ひと繁はん昌ちやう  
時とき計けい所ところ用もち此この人ひと々々此この心こゝろ得えを以もて時とき計けいを教ま師しと何なに



うめ万事時計と共に勤め行ひ給ふべし仁をま  
 ぶ事己ふよれり人によらんや財を費さばして  
 其施し隣里に行へれ遠くハ富國此基となふべ  
 取分我家倉廩満て禮節おとふの幸眼前ふ在  
 ぶべし

家内中時計とやもに舞神樂なふ音ハ神の御法ならん  
 家此内チャホヤ笑ふ鈴音ハ高天ヶ原此神樂なふらん  
 猶心を静めて觀念せれば時計ハ要用時間報告  
 此便宜ななるのこあらば閑居徒然の時と雖

無言ふして説法止む時なり曰く人間よ汝ら  
 我と共に刹那に消行く事恰も川の流の如し  
 れハ寸分の光陰も徒ら送る事なく人々我と共に  
 不動きたらなく天禄其中にありと間断なく説  
 と雖衆人の心不在焉聽不聞無言此説法聞く事  
 能てむ例の通り光陰を徒らして  
 宵寝して朝寝が好て晝寝し又折くハ居寝むりそむふ  
 時計此神ハよせ何れもつせ何れも此御催促ど  
 ふやらかふやら目ガ覺不覺ハ覺めても復うかく

覺ぬれハまこと也鼻と臍の下開ふ月日送りぬふら耶

心の祓ふりの時計の神比力らふも及ばぬ歎息

して時計一首を詠一たり

徒らふ可惜時間送ふ人地獄なるぞ往所なり

或學者時計を問て曰く死しとふ後ハ如何時計

答て曰く六時又問生せぬ先ハ如何時計答て曰

く六時又問現在ハ如何時計答て曰く六時敢て

問現在の六時ハ聞得て分明なり過去も六時未来も

六時と答給ふハ如何成事哉時計還て學者を問ふ

五時の過去たる後ハ何ぞ學者答て曰六時時計

又問七時未だ来らぬ先ハ何ぞ學者答て曰六時

時計又問現在ハ何時ぞや學者答て曰六時時

計笑て曰く我言ふ所と汝の言ふ所と寸分違ハ

ぬふ所らむや學者横手を打て發明せされと五

時の死んだ後を六時といひ七時いまぞ生せぬ

先を六時といひ其六時を現在といふ五時の業因

ハ六時の報い六時の業因ハ七時の報也之を三世

と号け此世を前世此種次第来世ハ此世此種次

寺長義兌

第過去も未来も只今わうり今を等閑小思ふ人

ハ死して地獄に往く事我

五時の過ぎ七時のまじき六時の地獄も何れハ極樂もあり

時の間小地獄もあれ極樂も何れを見つぬ人此眼を

心不在焉睹不見聽不聞食不知其味時計の説法

聞人此心小く小なきう故に聞事能をば時計ハ

時計我身ハ我身と別々小思ひ天地と同根なふ

事を知らば

時はるる便利のさう人間小三世を示さるをへかり

時計所持の人々此理を辨へ給ひ光陰を時計と

共小心を養ひ身を脩め富國強兵の補助と成

天下の太平を祈り給へ

一 第一此時辰儀を家業とせふ商人職人ハ別

て此心得有度もの也

孟子曰矢人豈不仁於函人哉矢人惟恐不傷人函

人惟恐傷人巫匠亦然故術不可不慎也

矢を造る者ハ人を傷る事を祈る函を造る者ハ

人の傷らせざる事我祈るされば矢我造る者ハ

志らばく不仁の徒なり函を造るものゝ志らば  
 く仁者此徒なり野子始此語を見て熟思ふ今  
 萬國交易日小月小盛なり其中に舶来の品を賣  
 買して家業とせる者有り皇國此産物を外國に  
 賣て家業とせるものあり夫國産を輸出して外  
 國此金に易る者へ己が家業の爲との思へど  
 も知らばく富國強兵の補助となふ是仁者此徒  
 と言ふべし又我國此金貨を外國に出し洋品を  
 家業とせる人へたとひ心中に邪欲をなくとも

志らばく皇國の衰微を求むる道理にて不仁の  
 徒ともいをんる故に我始に洋品を業とせる人  
 我善と思ふ然る小愚が二男時計此賣買を業  
 とせん事を望む愚思ふ小時計は固より衣食住  
 の外品にて世になくても事缺ぬ奢り此器械な  
 り奢ふもの久しからむといへば是は身代限ふ  
 及ぶの卵あり此卵を業とせるは不仁の徒なり  
 と戒めて敢て免さば其後故郷に赴き儉約此  
 名人と言れざる松兵衛の如く時計を用ふる時

ハ時計則富國強兵の先鋒せんぱう不異ふいならず又孟子  
 矢人やにん函人おんにん術不可不慎也此結句むすびくみを能々考へ見れ  
 バ矢人函人共ともみなくしてち叶なぬものあり此道  
 理を辨へ慎むときハ同一なり先矢人此慎むべ  
 矢を造ふ時一心不乱いっしんふらん此矢鎧このやよろいをも通せか一人  
 をも射貫かと思ひて製造たうぞうせへ一身いっしんの主宰  
 たふ心こころ祈る所ハ我造る矢必かならず世よ出へから  
 ぶ万が一よろずも世よ出る事ことありとも必賊徒あさまがたの手  
 小入るこいれあらむ官軍此手て小着つき悪魔外道を射破

り射通し朝敵退治の魁すまみとなり製造たうぞうしたる我名  
 までも何らをもへいと矢の根ね小向むかて生いふ人  
 小言こごふ如く朝夕祈るものならば矢人やにんも同おなく  
 く仁者にんしや此徒こゝろなり函を造ふ者も假令かじやう何程職しやく不達  
 たりとも官軍賊徒を論ろんせに價あや高き方へ賣渡  
 さばせられこそ不仁の徒なり函を造ふ者も一心不  
 乱らん小我製造の函おんハ弓も鉄炮も刀も鎗も一分  
 一厘も通とすと心をこころまめて製造たうぞうせへなほ又心  
 小念こねんふこゝろも此函必かならず世よ出べいらば萬が一よろず世よ不

詩長義院

ト

出る時ありとも必賊徒の身小着べらば官軍  
 此手小渡り官軍此身を守り矢玉鎗劔此中をも  
 恐むば朝敵退治の補助となり製造したる我名  
 遣ふ阿らもまへいと生さる人小言ふ如く朝  
 夕祈ふ者ならは是則仁者の徒なり故術不可不慎  
 也若両王とも此理も知らば慎もなき者何せり  
 勝ふと人間は矢人よりも函人まさると言ふ  
 べし矢人ハ人を傷る器械を造る函人も人を助  
 る器械を造る慎む時ハ矢人函人同一なり是を

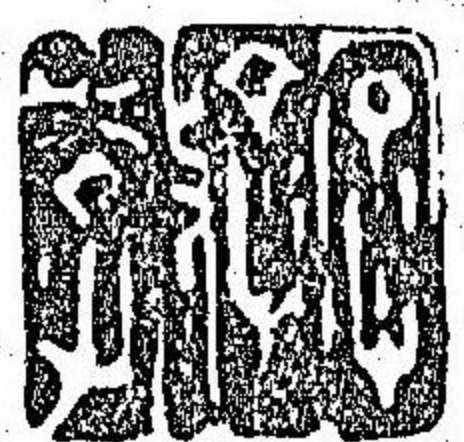
以て見ればはげめ國産を外國に賣る者を積善と  
 思ひ洋品銭賣捌く者銭積不善との思ひ一ハ一を  
 知つて未だ二を知らざりしが故なり積善も積不  
 善も心小有て業小阿らば同根同一此道理を辨へ已一  
 人を利せんとする小欲を捨て天下の人小時計の時  
 計たる所以を知らせ一寸の光陰も徒小過させまじき  
 が為小時計此媒約を致すの心得ふて家業とまれば天  
 祿其中小阿り知らむく富國強兵此一助と成り仁者の  
 徒とならんと思ひ聊の時計店を開く事銭二男小也

此意を異々も忘却する事やれ若己一人此小欲  
 に迷ひ買客此意小随ひ其位小應せさふ人へ金側金鎖  
 其外分不相應の品を強て賣へりら強て賣時  
 不仁の徒と成べし故小術不可不慎也世上一  
 般此品を家業とする人此心得有度者也尚又都  
 鄙共小是を求めて所持する衆人時計小随ひ光陰  
 を共みし心を養ひ身を脩め家を齊へ國を富し  
 仁者此徒となり給人事を希ふ

知見只時間を知見知も亦此  
 末至黄金は亦此以て免

学の時を習ふは時として  
 けとるなよするは如く

物庫講義 熊谷康忠述



著述之編寧雅藻宏蔚而疎於通俗  
不多和文淺說而有裨於啓蒙大方必  
有取于茲者

老樞居士識



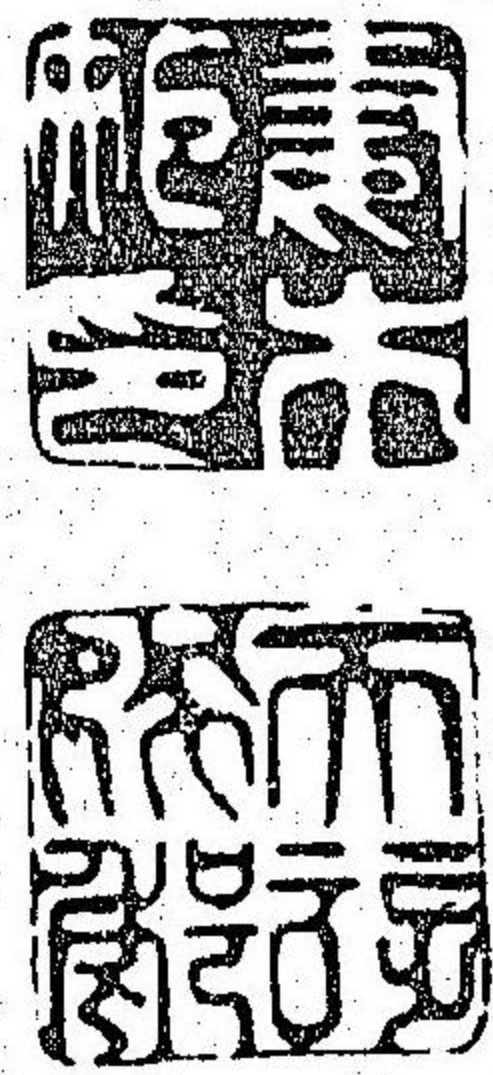
梅瑞

老友慈谷東洲翁嘗  
著此編授其子宗太  
者時辰儀高也欲開  
以適贈顧宗公自以  
措辭鄙近不敢許焉  
宗古強之因乞拙圖於



吉祥穆山君將付梓也  
予嘉斯著之有裨益乎  
童蒙書一言以還之

明治十年秋日獨醉散人妻木賴矩誌



山本敏行書

板權 免許 明治十年十月十六日

著述人

參前舍心學所

熊谷東洲

東京第五大區四小區  
練塲町六番地

時習堂時計店

同 宗太郎

同第五大區十三小區  
兩國米澤町志丁目八番地

出板人

賣弘人

森嶋文助

同第五大區七小區  
上野北大門町壹番地



